
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No.107

September 2017

ロシア史研究会2017年度大会特集号

10月14日（土）、15日（日）

東京大学駒場キャンパス

すでにお知らせしましたように、ロシア史研究会 2017 年度大会は 10 月 14 日（土）、15 日（日）の両日に東京大学駒場 I キャンパスで開催されます。プログラムと報告要旨は次ページ以降をご覧ください（同封の葉書を 10 月 6 日までに、ご返送ください）。皆様ふるってご参加くださいますようお願いいたします。なお、大会にかんする事務的な事項でのお問い合わせは、ロシア史研究会事務局（shukran_afwan(at)hotmail.com ※(at)を@に置き換えてください）鶴見宛にお送りください。

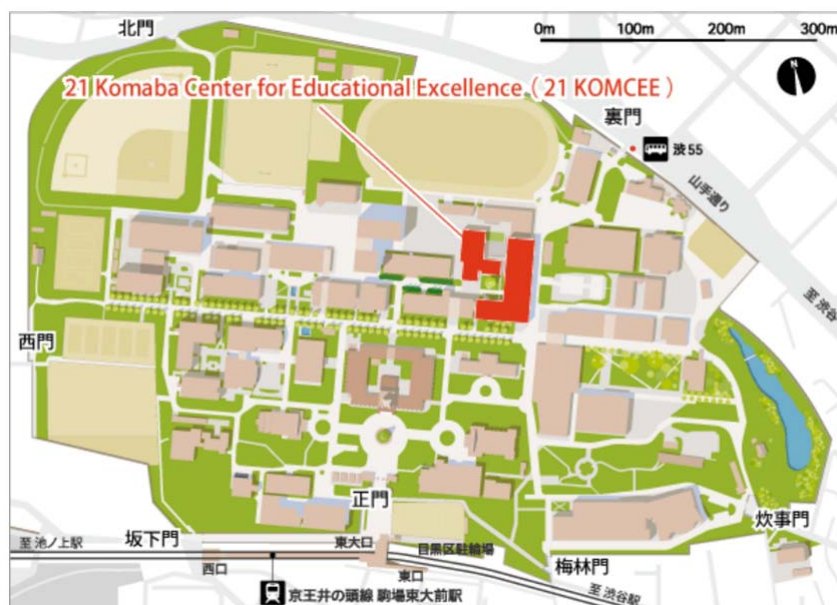
会場へのアクセス

東京大学駒場 I キャンパス 21KOMCEE East

京王井の頭線（各駅停車）「駒場東大前」駅東大口中下車、徒歩 4 分

正門を入れて正面に見える時計台のある建物（1号館）の右側を沿って銀杏並木まで進み、右折したところにある新しい建物です。

住所：東京都目黒区駒場 3-8-1



大会プログラム

会場：東京大学駒場 I キャンパス・21KOMCEE East

10月14日(土)

10:00~10:55

A 会場(211)自由論題報告

ヴァシリー・モロジャコフ

「ロシアから見た日本統治時代の台湾——帝政時代とソ連時代の比較」

コメンテータ：中見立夫

11:00~11:55

A 会場(211)自由論題報告

福地スヴェトラナ

「ソヴィエト連邦の日本人捕虜抑留とアメリカ、イギリスの対応」

コメンテータ：富田武

10:00~12:20

B 会場(212)パネル報告「東アジアのロシア人」

澤田和彦

「『日本における白系ロシア人』：ロシアで発見された新史料」

ピョートル・ポダルコ

「亡命者の回想録：革命の目撃証明資料および文学の新しいジャンル」

イゴリ・サヴェリエフ

「革命の人質——ロシアにおける中国人契約労働者、1916-1918」

アレクサンドル・クラノフ

「慶應義塾大学卒業生の作家ロマン・キムにとっての分水嶺としてのロシア革命」

倉田有佳

「ロシア革命後の日本への避難民・亡命者の大量流入・流出と日本の受入政策」

コメンテータ：藤本和貴夫

司会：長縄光男

12:20~13:30 昼食 (12時25分~13時25分 委員会)

13:30~16:00

共通論題 A(011)「ロシア革命とディアスポラ」

諫早勇一

「革命と在外ロシアの芸術家たち」

中嶋毅

「在外ロシアにおける教育研究活動の展開」(仮)

田中ひかる

「ロシア出身のユダヤ系移民によるアナーキズム運動」(仮)

コメンテータ：長縄光男・鈴木健夫

司会：鶴見太郎

16:15~17:45 総会(011)

18:00~ 懇親会(生協食堂 2F)

10月15日(日)

9:30~12:00

共通論題 B (011)「ロシア革命と日本」

黒川伊織

「ロシア革命と日本の社会運動」

太田丈太郎

「黒田乙吉と革命作家たち」(仮)

ヤロスラフ・シュラトフ

「ロシア革命と対日政策：帝政期からソ連期へ」

コメンテータ：藤本和貴夫

司会：富田武

12:00~13:30 昼 食

13:30~16:00

共通論題 C (011)「ロシア革命とはなんだったのか？ 百年目に考える」

池田嘉郎

「臨時政府再考」

フョードル・ガイダ

「ロシア自由主義者と1917年二月革命」

長縄宣博

「中央アジアの革命を再考する：沿ヴォルガ・タタール歩兵旅団を手がかりに」

コメンテータ：和田春樹

司会：松里公孝

※ロシア語使用、通訳なし

☆懇親会の参加費は、A会員が6,000円、B会員が4,000円の予定です。

☆ペーパーはロシア史研究会ホームページよりダウンロードできます。

報告要旨

【1日目 10月14日(土)】

自由論題 (10:00-10:55) (A会場 211)

- 「ロシアから見た日本統治時代の台湾——帝政時代とソ連時代の比較」
ヴァシリー・モロジャコフ (拓殖大学)

ロシアにおける「フォルモサ・ヴォッチング」(台湾観測)の歴史は、1874年の日本出兵からである。そのころロシア海軍将校、のち学者と記者は台湾の地理、歴史、民族、言語を研究し始めた。日清戦争の結果として台湾が日本の植民地になった時から、ロシアの分析官はその調査・研究を続けている。

帝政時代の観測中心点は、一方経済的、他方軍事的であった。一般的に言えばロシア側は、植民地として台湾が日本の「黒字」あるいは「赤字」になり、日本の経済力と軍事力を強めるか弱れるか、と知りたかった。日露戦争以前、両ファクターが同じように大事と考えられた。日露戦争直後、台湾の経済状態は軍事状態より大事と見られた。

1920年代には、日本の植民地がソ連共産党とコミンテルンの対外政策のフォーカスに入った。日本を帝国主義列強と見なすソ連政権は、植民地に存在した経済・社会・民族問題及び本土に対する不満を利用してみた。対台湾政策はその試みの一つであった。

ソ連共産党とコミンテルンは、1923年のドイツ革命の失敗直後、アジアでの革命を世界革命の最も近い道と論じた。そして、中国及び列強の植民地が革命的闘争と共産主義的活動の現場として見なされた。

日本統治時代の台湾の国内状態を分析・評価したソ連・コミンテルンの専門家は、直截な情報の不足にもかかわらず、事実をかなり正しく理解したと結論できる。しかし、その専門家は、共産主義独裁政権の下、そのイデオロギーの弾圧を受けて、日本の台湾政策を激しく批判して、台湾における民族問題の重要性、労働・左翼運動の範囲、社会主義革命の可能性を過大に見積もっていた、と結論できる。

自由論題 (11:00-11:55) (A会場 211)

- 「ソヴィエト連邦の日本人捕虜抑留とアメリカ、イギリスの対応」
福地スヴェトラーナ (首都大学東京)

ソ連による日本人捕虜の抑留において、満洲での捕虜の取扱いに関するソ連政府の方針、および日本人捕虜の抑留を探知したアメリカの対応について、ソ連とアメリカの一次史料に基づいて検証した。

関東軍降伏前の8月16日にベリヤ、ブルガーニン、アントーノフの連名で、極東軍総司令官ヴァシレフスキーに命令「戦線後部の警備体制および満洲における軍事捕虜収容所の設置について」が発令された。この命令は第3項「日満軍軍事捕虜はソ連領内に移送されない」が注目されるが、第1項は日本人捕虜の集結地点の警備に関する命令であり、第3項はこの第1項に付加された命令であった。この命令はシフローフカと呼ばれる軍の命令系統に属するものであり、戦闘部隊などがその時点でとるべき行動について具体的に指示するための命令で、次の命令が発令されるまで有効とされる。

そして次の命令がスターリンによる国家防衛委員会決定「日本軍軍事捕虜 500,000 人の受け入れ、収容 および労働使用について」であり、捕虜のソ連領内への移送命令であった。従ってベリヤ等の命令はスターリンの命令を前提として、この命令が発令されるまで捕虜は移送されないという意味であったと解釈される。

それは軍の独自判断に基づく過酷な移送による捕虜の死亡や衰弱を防ぎ、健全な労働力として収容所に引渡すためだったと考えられる。

満洲に設置された日本軍の捕虜収容所には、アメリカなどの連合国の捕虜約 1700 人が収容されていた。日本が無条件降伏した直後に捕虜収容所付近に落下傘降下したアメリカの諜報部員は 8 月 20 日に極東軍と共に捕虜を解放した。モスクワ駐在アメリカ大使ハリマンは満洲の収容所には約 1200 人のアメリカ人捕虜が収容されていることを指摘して、彼らの安全で迅速な帰還についてソ連当局に協力を要請した。これに対して具体的な対応が決まり次第連絡するとの回答がなされた。このことからアメリカ人捕虜は解放された後に極東軍の管理下に置かれたと考えられる。ソ連はアメリカ人捕虜の帰還について明らかに主導的な立場にあった。

諜報部員はその後、極東軍による日本人捕虜のソ連領内への移送について本国に報告した。この移送はポツダム宣言第 9 項に違反する可能性があったが、アメリカは黙認の姿勢をとった。その理由は極東軍の管理下にある捕虜の帰還を優先させたためと考えられる。

パネル報告 (10:00-12:20) (B 会場 212)

東アジアのロシア人

● 『日本における白系ロシア人』：ロシアで発見された新史料

澤田和彦 (埼玉大学)

2015 年に報告者はウラジオストクの研究者 A. ヒサムディーノフ氏からある史料を入手した。それは 1990 年代初頭に氏が KGB の元職員の軍人 (故人) から入手した、日本在留ロシア人の状況に関する記録の photocopy である。この記録は破棄すべきものだったが、職員はこれらの文書が研究者にとって興味深いものであるかもしれないと考えて、photocopy を作成していたのである。

「極秘」の印を付されたこの記録がどのようにして作成されたのかは不明だが、その多くは日本の諜報・防諜機関が作成した日本語の記録をソ連の合同国家政治保安部がロシア語に訳出したものである。ここから判明するのは、ソ連の諜報機関が日本の諜報・防諜機関内に自らの秘密諜報員を有していたことだ。彼らは日本と日本の国家権力の支配下にあった中国の諸地域 (長春、奉天、大連と南満洲鉄道沿線) と朝鮮に居住するロシア人についてのほぼ余すところなき情報を日本の諜報・防諜機関に伝えるとともに、その情報とこれらロシア人に対する日本の官憲の対応策をソ連の諜報機関に伝えていたのである。これらの情報はハバロフスクの合同国家保安部全権代表 T. デリバースのもとに集約されていた。

記録の表紙には全 213 頁とあるが、コピーが取られたのは全部で 35 枚である。1928 年 8 月の時点から 1932 年 11 月頃の時点までの情報が記載されている。目次は以下のとおりである。

文書 1 南満洲鉄道用地と日本に在住するロシア人の調査表

- 文書2 目次
- 文書3 概論。ロシア人の組織の状態。利用しうる組織の調査。利用しうるロシア人の調査
- 文書4 ロシア人によって組織されたさまざまな協会の調査表（1928年8月現在のデータ）
- 文書5 北海道の白系ロシア人について
- 文書6 ロシア人白衛軍兵士の会議に関する旭川憲兵隊長馬場^{きかく}亀格の情報
- 文書7 日本の白系ロシア人
- 文書8 日本の白系ロシア人。コンパニオン
- 文書9 日本の白系ロシア人。チェルトコーフについて
- 文書10 日本と南満洲鉄道地域に在住するロシア人の状態概観

本報告ではこの史料の内容を紹介し、その有する意義について検討したい。

●「亡命者の回想録：革命の目撃証明資料および文学の新しいジャンル」

ピョートル・ポダルコ（青山学院大学）

開国以降、来日するロシア人の数は、明治・大正にわたって徐々に増え、彼らの旅行日記や新聞・雑誌の記事が多く見られるようになった。しかし、彼らの大部分は、日本でわずか数週間滞在しただけで日本における生活や風土などについて本当の知識を持たなかったため、その〈日本観〉は当然〈皮相〉なものに止まらざるをえなかった。

他方で、1917年2月および10月の革命後来日した亡命ロシア人の中には、日本にそのまま根を下ろした人々や、第三国へ移住する前に日本に十数年間住んでいた人々がいた。その一部は、晩年に自分の生涯を振り返りながら、回想録や個人的経験を自伝としてまとめている。その回想録の一部は、現在まで未発表のままに残っているものもある。しかし、20世紀のロシアおよび日本の歴史、特に革命・国内戦争だらけのロシア、そして比較的安全な国に見えた、大正デモクラシーから昭和前期の軍国主義への転換中だった日本に関する彼らが書いた文章、時代の目撃者として書かれたそれぞれの回想録は、貴重な資料としての意味をもっている。

亡命者の回想録の執筆はほとんど戦後、1940-1950年代に行われた。したがって彼らは、自分の意見を比較的自由に述べられる状況の下で書いたのである。それらの回想録には、一般の回想録と違って、いくつかの特徴がある。ところで、日本在留した亡命ロシア人が書いた回想録は、文学としても、歴史的な資料としても今までそれほど研究されていない分野である。これは、今後特別な調査の対象になると思われる。今回の報告では、来日した数人の亡命者たちがロシア革命や日本生活などについて、どのような立場からそれぞれを判断したか、ということを通して新しいアプローチを持って調べていきたい。

●「革命の人質—ロシアにおける中国人契約労働者、1916-1918年」

イゴリ・サヴェリエフ（名古屋大学）

第一次世界大戦期には、イギリス、フランス、ロシアは、戦争が三年目に入ると、労

働力不足に悩み、東アジア最大の人口を擁する中国から契約労働者を雇用することにした。西部戦線における中国人労働者に関する研究は近年発表されたが、ロシアの軍事勢力における中国人労働者の貢献についてはほとんど知られておらず、その研究はまだ断片的である。本稿の目的は、ロシア、中華民国(台湾)の公文書館の史料、及び先行研究の分析に基づき、第一次世界大戦期における中国人契約労働者の募集・輸送・労働管理体制の形成について概観したうえで、彼らのロシアでの体験とロシア国内戦争への参加について明らかにすることである。

1916年1月に、内務省、鉄道官庁などの政府機関の代表者による官庁相互間委員会が設置され、中国人の募集・輸送・雇用システムを形成して国内外で管理するようになった。中国人労働者の主要な雇用先は、ロシア陸軍が管轄していた野戦建設局、各地の鉄道建設局及び鉱山などであった。しかし、様々な問題を抱えた労働管理体制は、1917年のロシア国内の混乱の影響を受け、崩壊への道を辿ることになる。1917年の二月革命後、企業破綻が相次ぎ、中国人の多くは企業から逃げ、大都会などで新しい雇用先を探し自由市場で雑役をし、あらゆる交通手段を利用して自力で中国に帰国することを試みていた。

ロシアの首都ペトログラード市政府では、官庁相互間委員会の協力を得て、中国人労働者の引き揚げや残留した者の滞在に関する特別委員会を設置することが決められた。1917年後半には、中東鉄道株式会社は、中国人労働者を帰国させることに絶えず努めた。そうして、3万~4万人が、1917年秋から1918年5月までに帰還した。しかし、残りのおよそ2万~4万人の中国人は、崩壊しつつある経済や内戦の渦中に巻き込まれるようになった。そのうち、およそ7千人がペトログラードに渡り、雑役をしながら、在露中国大使館に帰国を求めた。ロシア在住中国人市民同盟という組織は、1917年4月に中国人によって創設された。帰国できなかった中国人の一部は、困難な状況に陥り、1918年から1922年にかけて赤軍と白衛軍の両方に入隊し、頻繁に戦場に送られた。こうして、母国の貧困から逃れようとしてロシアに仕事を求めた中国人は、悲惨な内戦の流血に巻き込まれ、赤軍と白衛軍の両方に利用されることがあった。

● 「慶應義塾大学卒業生の作家ロマン・キムにとっての分水嶺としてのロシア革命」
アレクサンドル・クラノフ

**Русская революция как водораздел
в судьбе выпускника Кэйю писателя Романа Кима**

Согласно его официальной биографии, выдающийся советский писатель Роман Ким, ставший в 1950-60 гг. одним из основателей жанра шпионского детектива в СССР, с 1906 по 1913 гг. обучался в Токио, в системе Кэйю (в школе Ётися и колледже Фуцубу). По его собственному признанию, Ким собрался жениться на дочери своего наставника и остаться в Японии навсегда, но в 1917 г. по требованию отца так же навсегда покинул Токио, вернувшись во Владивосток.

Роман Ким мечтал поступить в Токийский императорский университет и стать писателем, но его отец – видный деятель антияпонского подполья в русском Приморье Николай Ким, направил сына в Токио с совершенно другими целями. Он надеялся, что Роман

примкнет к корейскому освободительному движению, используя знание Японии, обретенное за годы жизни в Токио. Реальность едва не сорвала этот коварный план: Ким на всю жизнь остался влюблен в свою вторую родину, но все же вынужден был вернуться в Россию.

Последовавшая за революцией японская интервенция в Приморье навсегда изменила отношение Романа Кима к той политике, что проводилась милитаристской Японией в 1920-30 гг. Ким не стал корейским подпольщиком, но окончив в 1923 г. Дальневосточный государственный университет, будучи дипломированным японоведом и впервые в истории переводя на русский язык несколько новелл Акутагава Рюносукэ, выбрал службу в советской контрразведке.

До 1945 г. Роман Ким, написав две прекрасные книги о японской культуре, оставался тайным кошмаром японской разведки в Москве, и мечтал об окончательном возврате на литературное поприще. Это удалось ему только после Второй мировой войны, когда Ким был признан как мастер приключенческого, «шпионского» детектива и в таком качестве вошел в историю советской литературы.

Несколько лет назад в России началось исследование запутанной биографии Романа Кима. О нем написано несколько книг, а одна из них даже переведена на японский язык. Тем не менее, самым загадочным периодом его жизни остаются события вокруг русской революции 1917 г. Возможно, ключ к раскрытию тайны Романа Кима находится здесь, в Японии. Поиски его только начинаются.

● 「ロシア革命後の日本への避難民・亡命者の大量流入・流出と日本の受入政策」
倉田有佳（ロシア極東連邦総合大学）

難民・移民・亡命者は、宗教的・政治的・経済的な理由から生じた国際的な人的移動であり、現代的な問題である。日本に流入した最初の大量の避難民は、1917年のロシア革命、続く国内戦争の混乱の中でロシアから直接、あるいはハルビンなどの避難先を経由して日本に流入した人たちで、当時日本では「露国避難民」と呼ばれた。本報告では、ロシア帝国からの避難者ということで、「ロシア避難民」とする。

さて、日本政府にとって大きな問題となったのは、避難民をどう受入れるか、あるいは排除するか、つまりそのための「選別」だった。初期の段階では、「外国人入国ニ関スル省令」（1918年1月24日内務省令第一号）がロシア避難民にも適用され、旅券のほか、在外公館で発給する査証を取得するために提出させられる「宣言書」や政治志向が「選別」の基準とされた。これが1920年初頭のコルチャーク政権崩壊により、シベリア方面からロシア避難民の日本への大量流入が予想されると、日本政府は「提示金制度」を導入し（1920年2月17日警保局通牒）、日本への「滞留」を希望する場合には、外国に渡航するための「通過」（トランジット）の6倍に相当する1,500円以上の所持金の提示を求めた。ただし、渡航後の生活を支えるに確実と日本官憲が認める引受人がいる場合は、この金額を所持しなくともよかった。つまり、一定の経済力が入国に当たっての選別条件に加えられたのである。

外務省記録によると、1917年から20年の3年間に日本の各港に上陸したロシア避難民は、約1万5千人に及んだ。大半は日本経由で第三国（米国等）へ避難・亡命する人

たちだったが、この統計値には、ウラジオストクと日本を往来する元白軍の軍人や、米
国からロシアへ帰国するために日本（主に横浜港）に上陸した革命派ロシア人の数も含
まれていると考えられる。こうしたこともあり、ロシア避難民の正確な数を割り出すの
は容易ではない。

「旧露国籍者」、あるいは「無国籍者」となった避難民の身元証明書となり、かつ国
境を越えた移動を保障したのが「ナンセン・パスポート」（1922年7月の第19回国際
連盟理事会で可決）で、他国に遅れて日本政府が発給を実施したのは、1924年2月の
ことだった。

世界各地に散ったロシア避難民が百数十万人程度だったとすると、日本への流入は全
体の100分の1ほどでしかなかったが、日本政府の最初の（避）難民対応として考える
機会ともしたい。

共通論題 A (13:30-16:00) (011)

ロシア革命とディアスポラ

● 「革命と在外ロシアの芸術家たち」

諫早勇一（名古屋市外国語大学）

亡命ロシア文学を論じるとき、「鉄のカーテン」という語がふつうに用いられ、ナボ
コフをはじめとする亡命者の文学はその存在を否定され、ソ連国内では読むことができ
なかったことが強調されてきた。

とはいえ、文学に関しても、まだ誰が亡命の道を選ぶのか、誰が帰国するのかわか
らないまま、後にソヴィエト文学の大御所になるゴーリキーや、亡命の道を選ぶホダセ
ーヴィチらが一緒に活動していた時代——1921年から23年頃までのベルリン——が
あったことはよく知られている。そして、その後両陣営は袂を分かち、ソ連の文学と亡
命者の文学が峻別されてしまったことも。

ただ、文学に当てはまることがそのままその他の芸術にも当てはまるわけではない。
拙著『ロシア人たちのベルリン 革命と大量亡命の時代』にも記したように、画家たち
に関していえば、彼らの国外への出国は比較的容易だったし、ソ連時代でも、国外で暮
らすベヌアやドブジンスキー、ラリオノフらに関する研究書が刊行され、「ロシア人
亡命者の芸術生活を好意的に描き出した論文」も公刊されていた（セヴェリュヒン）と
いう。

また1930年代には、国外に暮らしていたアリトマンやビリービン、さらにアヴァン
ギャルド芸術家だったファリクらが帰国するが、帰国後「弾圧を受けたものは誰もいな
い」（シャーツキフ）という。作家が置かれた状況と、文学以外にかかわる芸術家が置
かれた状況とはかなり異なっていたと考えられるから、文学以外にかかわる芸術家たち
を「亡命芸術家」と呼ぶことは適切でなく、ここでは「在外ロシアの芸術家」という表
現を選んだ。

本報告では（ロシア革命の前後に国を離れた）こうした（作家以外の）「在外ロシア
の芸術家」について、いくつかの分野から代表的な人物を選び出し、たとえば画家・彫
刻家ではエコール・ド・パリにかかわっていた人びとを中心に、演劇界からはゲルマノ
ワやミハイル・チェーホフ、音楽家ではニコライ・ナボコフなどに触れながら論じてみ
たい。

なお、この時代ロシアに帰らなかった人びとと（いろいろな時点で）帰国した人びととの交流も無視できないので、エレンブルグのような「ソ連作家」にも言及しながら、1920-30年代のヨーロッパにおける在外ロシア芸術家たちの活動を跡付けることができたかと考えている。

● 「在外ロシアにおける教育研究活動の展開」

中嶋毅（首都大学東京）

1917年のロシア革命後に亡命した人々は、ソヴィエト政権が短期間で崩壊して近い将来に亡命地からロシアに帰国する期待を抱きつつ、帰国後の生活に求められる知識や教養を子弟に与える目的で、ロシア語による伝統的教育を熱心に展開した。しかし帰国の希望が次第に遠のいて亡命地での生活が長期化するようになると、異郷の地で生きるために現地の教育機関に就学する傾向が徐々に強まっていった。それでも1920年代には、主要な亡命ロシア人コミュニティで、ロシア語による亡命ロシア人高等教育が活発に展開された。それは、これらの教育機関が亡命ロシア世界の若者にロシア語による高等教育を施す目的を有したのみならず、優れた亡命ロシア知識人に創造的研究の場を提供する目的も追求したためであった。早くも1920年にはフランスでロシア・アカデミーグループが組織され、続いてドイツ、チェコスロヴァキア、ブルガリアなど各地でアカデミーグループが誕生して、亡命ロシア人の学術ネットワークが形成された。

「在外ロシア」における学術活動の拠点となったのは、多くの亡命知識人を擁したプラハであった。ここでは1922年以降、ロシア法科大学、ロシア教育大学、農業協同組合大学、ロシア人民大学、商科大学が相次いで設立された。これらの大学では、亡命ロシア人青年がロシア語による専門教育を通じて伝統的なロシア知識人として養成されるとともに、多数の亡命知識人が知的活動の場を確保して学術研究を継続した。プラハほどには学術研究志向ではなかったものの、パリやベルリン、ソフィア、ハルビンなどにも亡命ロシア人高等教育機関が設立されて、旧ロシア帝国の学知の継承が図られた。

こうしてヨーロッパを中心に、世界各地の亡命ロシア世界で帝政期の伝統に基礎をおく学術研究が展開された。これを支えたのは、亡命先で展開されたロシア語印刷物の出版活動と、それを担った多数の亡命知識人の存在であった。彼ら亡命知識人による教育研究活動は、ロシア語による教育を施すロシア人教育機関、とりわけ高等教育機関を通じて若い世代に継承され、祖国から離れた異郷の地で独自の発展を遂げたのである。本報告では、これまで報告者が調査してきたハルビンを中心として、在外ロシアにおける教育研究活動の実態とその意義について改めて考えてみたい。

● 「ロシア出身のユダヤ系移民によるアナキズム運動」

田中ひかる（大阪教育大学）

この報告では、ロシアからアメリカ合衆国に移民したユダヤ人たちが、なぜ／どのようにして、アナキストになったのか、また、どのような思想や運動を展開したのか、という問題を、彼らの移民の経験に焦点を当てて検討し、ロシア・アナキズム史を、よりグローバルな枠組みの中で捉える視点を提示することをめざす。

かつて、スペインやロシアにアナキズム運動が成立した要因として、もっとも強調されたのが、「工業化の遅れ」であった。しかしながら、19世紀から現在に至るまで、アナキズム運動

が形成されてきたのは、その多くが世界規模の大都市であり、その担い手のほとんどが、工業化が進展した地域の構成員であった。

他方、近年では、国境を越えて移動した結果アナーキストとなった人々の存在が目されるようになり、移民とアナーキズムの形成との関係性に焦点を当てた研究が続々と発表されるようになった。アナーキズム研究にも Transnational Turn が起きているとも言われる。

ロシア出身のアナーキストについても、やはり「工業化の遅れ」よりも、「人の移動」という要因を重視すべきことがわかる。まず、かつて大杉栄が指摘したように、ロシア人アナーキストの多くはヨーロッパやアメリカに移民した後にアナーキストになっている、という事実がある。また、大杉は指摘していないが、ロシア人といってもそのほとんどはイディッシュ語を母語とするユダヤ人であり、彼らの多くがニューヨークなどの大都市で被服製造労働者として働いていた。

本報告では、そのようなロシア出身ユダヤ系移民アナーキストの「国境を越えた移動の経験」を分析し、彼らの様々な経験が思想と運動の形成にどのように結びついているか、という点について検討する。分析対象は、1) 移民前のロシアでの経験、2) 移民後のアメリカでの経験である。1)については、主として移民をする動機、2)については、移民後の人的交流、アソシエーション、マスメディア、娯楽、他のエスニック集団との関係性、および、国境を越えて故郷のロシアと結びつくトランスナショナルな活動などを分析する予定である。

【2日目 10月15日(日)】

共通論題 B (9:30-12:00) (011)

ロシア革命と日本

● 「ロシア革命と日本の社会運動」

黒川伊織

本報告の課題は、ロシア革命が当該期日本の社会運動に与えた影響を、時間軸に沿いつつ、また、合法局面と非合法局面の両方に留意しながら、概観することである。

ロシア革命が当該期日本の社会運動に与えた影響を概観する際、重要なのは、第一次世界大戦が日本社会に与えた影響を踏まえることである。第一次世界大戦勃発後の日本における急激な社会変容は、ロシア革命のインパクトが受容される前提となった。

合法局面でロシア革命のインパクトが日本に及んでくるのは、1920年のことである。その前年(1919年)に創刊されたこの時代を代表する総合雑誌『改造』の誌面では、1920年以降、「労農露国」「赤色露国」が盛んに紹介されている。このように、ロシア革命と日本におけるその影響とのあいだにはタイムラグがあることに留意する必要がある。コミンテルンの情報が入ってくるのは、さらにその翌年(1921年)のことで、日本では第二インターナショナルと第三インターナショナル(コミンテルン)の違いが問われることになった。

非合法局面では、シベリア→上海→日本、あるいはアメリカ→日本という経路で、在露朝鮮人・中国人・在米日本人のエージェントにより、日本のコミニストへの働きかけがなされた。そのような働きかけに呼応して大杉栄が上海に渡ったのは、1920年10月のことである。1921年4月には、そのような連絡の結果として、第一次日本共産党が東京で結成されることになる。1922年1月の極東諸民族大会は、日本国内のコミニ

ニストとモスクワとの連絡がはじめて成り立ったという点で、画期的な出来事であった。なお、最初に上海に渡ったのが大杉栄であったという事実が示すように、この時点でのアナ・ボル関係は、一般的に考えられているよりもはるかに複雑であった。

コミンテルンは、日本軍のシベリアからの撤退が実現した1923年はじめ以降、ウラジオストクに極東ビューローを置いて第一次日本共産党を指導しようとした。日本側からは、1923年6月の第一次共産党事件を契機として数名の指導者がウラジオストックに密航し、在外ビューローを構成した。しかし、このような体制は、国内・国外の両指導部の確執、関東大震災の影響などにより行き詰まり、1924年春の解党に至ることになる。日本共産党の再建工作が始まったのは、1925年に日ソの国交が成立しヤンソンが来日して以後のことであった。

● 「黒田乙吉と革命作家たち」

太田丈太郎（熊本学園大学）

黒田乙吉（1888-1971）は日本人で唯一、十月革命をモスクワで身近に見聞した新聞記者として知られる。とはいえ黒田の新聞記者のみならず、日ソ同時代文化のコーディネーターとしての本領は、革命から約十年後の1925-27年、二度目のモスクワ滞在中に発揮された。その活躍は報道のみならず、「ヴォークス」（全ソ対外文化連絡協会）主催による最初の「日本文学の夕べ」に参加（1926年4月）したほか、作家ピリニャークの来日（同年3-5月）、日本での「新ロシア美術展」開催（1927年5-7月）に関わるなど、多岐にわたった。

なかでも、黒田のモスクワにおける人的ネットワークのうち特筆すべきは、同時代ロシアの文学者たちとの交遊である。本稿では「革命作家たち」としたが、それはなにも革命を書いたプロレタリア作家のみを意味するのではない。革命の混乱のなかから従来の文学では想像すらできなかった語彙やリズム、生活の体感、手法とイメージを駆使する作家たちがきら星のごとく立ち現れてきた。なかでも、革命後ゴーリキーの「世界文学」出版所の周辺に集まった「セラピオン兄弟」を名乗る作家たちがいた。これに関わった、または近い位置にあったフセーヴォロド・イワーノフ、ピリニャーク、ザミャーチン、ニキーチン、フェージン、リージンらと黒田は親交を結び、彼らの家に招かれるばかりか、ときには「スキヤキ会」を催して、アルバートの自宅（かつてのブルジュワルスキーの家）に彼らを招くのだった。その交遊はいわゆる「同伴者作家」とどまらずプロレタリア作家、農民作家たちをも含み、幅広かった。

モスクワ文化人との人的ネットワークにより実現し、黒田にとってソ連体験のピークとなったのが、1927年10月末、妻子とともにイタリア・ソレントにゴーリキーを訪問したことである。革命の渦からそのままあらわれてきたかのようなこの文豪とじかに対談し、その談話に耳を傾けながら黒田はロシア農村の奥深さ、底の知れなさを思うのだった。その場に、のちにゴーリキー謀殺の下手人の一人とされるクリュチコフが同席していたことは示唆的である。

黒田ののこした記事から明らかになるのは、書物や論文、文学史のテキストではもはやうかがい知ることのできない同時代ロシア作家の、活人画のように生き生きとした姿態である。あたかも彼ら特有の言い回しや口跡すらも聞こえてくるかのような再生不能の一回性の現場である。黒田の未発表写真を紹介しながら、その一回性の現場を追体験することが、本稿の目的である。

● 「ロシア革命と対日政策：帝政期からソ連期へ」

ヤロスラフ・シュラトフ（神戸大学）

帝国時代末期、ロシアの極東政策の親石は対日提携路線だったが、この構造は 1917 年の革命によって破壊された。東アジア・極東地域のパワーバランスにおいて指導的な役割を果たした日露提携の一極が崩れ、ロシアは大動乱に陥って国内戦争に突入した。1917 年末から 1918 年にかけて、シベリア・極東各地では様々な体制の政権が誕生し、諸外国による干渉戦争が開始された。

これまでの秩序が崩壊する中、あらゆる勢力が積極的に動き出した。満州蒙古における主権回復を狙う中国、利権を争う各列強に加えて、革命が掲げた民族自決主義及び反帝国主義に刺激され、西洋列強から迫害を被る中国、日本の植民地支配下に置かれた朝鮮半島などにおいて民族解放運動・ナショナリズムが台頭するようになった。ヨーロッパではヴェルサイユ体制、東アジアではワシントン体制から除外されたソヴィエト・ロシアは、上記の要素を考慮に入れ、各列強の対立を利用し、革命後に形成しつつあった新たな国際秩序に挑戦しながら、極東政策を展開していた。そこで、最大の挑戦は、本地域における最強国の日本との関係だった。

ソヴィエト政権は白紙から対日政策を考える課題に直面したが、1917 年 11 月から 2 年間にわたり、内戦と干渉に苦難の中で、対日・極東政策は事実上「宣言外交」にとどまった。1920 年初頭から、地方から提案された緩衝国案を用いた中央政府は、本格的な極東政策に着手した。そして、極東共和国の枠組みで極東露領の支配権を獲得しながら、日本・アメリカ・中国との協議に入り、1922 年末まで、北サハリン以外の地域から干渉軍撤兵を実現した。本稿では、ソヴィエト政権樹立からの対日姿勢をまとめ、対日アプローチをめぐる議論が非常に活発的に行われ、本格的な対日政策が立案・実行されるようになった極東共和国時代に焦点を当てながら、日露関係から日ソ関係への移り変わり過程を再構築する。

この時期、対日・極東政策の立案及び実施過程は地方の関係者に大きく左右されており、しかも、様々なアクターが政策決定に積極的に関わったので、極東政策および対日アプローチの多極性が目立った。なお、地方の関係者の対日姿勢は、軍事的衝突も辞さないぐらいで早期ソヴィエト化促進論から、大幅な経済的譲歩＝利権供与にまで、非常に流動的に動いた。中央と地方のレベルで見られた、様々なアクターの間での噛み合いが続く中で、一貫した対日戦略を講じるのは困難であり、対日交渉に備えて立場を統一させるまで時間がかかった。本稿は、帝政期との連続性について論じながら、ソヴィエト政権の対日政策にはどのようなアクターが関わり、彼らはどのような概念を持ったのか、政策決定過程はいかなるものだったのか、中央⇔地方の関係はいかなるものだったのかを考察する。

共通論題 C (13:30-16:00) (011)

ロシア革命とはなんだったのか？ 百年目に考える

● 「臨時政府再考」

池田嘉郎（東京大学）

臨時政府はロシア革命の研究史上、あまり恵まれた扱いを受けてこなかった。アメリカと日本では、1917年研究は社会運動に、また社会主義政党の動向にもっぱら関心を向けてきたので、臨時政府それ自体に光が当てられる機会は少なかった。この点、ソ連ではスタルツェフ、ズナメンスキー、ヴォロブーエフといった研究者が、アルヒーフ史料を使いながら臨時政府の諸政策について分析しており、状況はずっとよかったといえる。それでも、臨時政府がなし遂げたことよりは、できなかったことの方が自ずから論じられがちとなり、その歴史的位罫について十分な考察がなされたとはいえない。

実際、臨時政府が八か月しか存続できなかつた以上、それが成し遂げたものについて語るのは難しい。それでも、その政策の方向性や、秩序構想に注目するならば、また、それらとボリシェヴィキ政権下でなされたこととを比較するならば、臨時政府の歴史的な位置づけもよりはっきりしたものになるのではないだろうか。臨時政府が行なおうとしたことのうち、どれがボリシェヴィキ政権によって引き継がれたのであろうか。また、どのような点はボリシェヴィキ政権によって放擲されたのであろうか。これらのことを、本報告では検討してみたい。

史料としては、『臨時政府会議録』全4巻（モスクワ、2001 - 2004年）にくわえて、ロシア連邦国立アルヒーフが所蔵する法制審議会（Юридическое совещание）の文書（フォンド1792）を主に用いる。臨時政府にとって法制審議会は法制関連の諮問機関であり、さらに諸官庁の提出する法案は基本的には全てここで審査を受けたのちに、臨時政府の審議にかけられた。諸差別の廃止、憲法制定会議の準備、地方自治制度の構築、自治運動および諸宗派への対応など、1917年のロシアが内政面で直面していた広範な問題について、基本的な対応の方向性を決めていたのが法制審議会である。その点で、ボリシェヴィキ政権下での共産党中央委員会政治局とやや似た機能を果たしていたといえよう。ココシキン、ナボコフ、マクラコフ、ノリデ、ラザレフスキーといったカデットの法学者が法制審議会の中心メンバーであり、5月に連立政府ができたのちもその状態は変わらなかった。

本報告ではとりわけ、中央権力機構の構築と民族問題への対応という二つの点に絞って、臨時政府の活動について検討する。この二つの点に絞ることで、臨時政府がつくろうとしていた国制の特徴を明らかにしたい。そして、それらをボリシェヴィキ政権下での状況と比較することで、ロシア革命とは何だったのかという問いにあらたな光を当ててみたい。

● 「ロシア自由主義者と1917年二月革命」

フョードル・ガイダ（モスクワ大学）

Российские либералы и Февральская революция 1917 г.

(тезисы)

Либеральный «штурм власти». Провозглашенное в 1914 г. в России «священное единение» было тактическим приемом как правительства, так и, в еще большей степени, оппозиции. Развивавшийся с весны - лета 1915 г. внутривластный кризис привел к усилению значения радикальных либералов (кадетов), что создавало непреодолимый кризис Третьей системы. Требования Прогрессивного блока имели

невыполнимый на практике, деструктивный характер. С осени 1915 г. оппозиция оказалась перед дилеммой дальнейшей радикализации или политической гибели (соглашательство привело бы к резкому ослаблению влияния). Начавшийся 1 ноября 1916 г. «штурм власти» был, в первую очередь, обусловлен стремлением лидеров оппозиции сохранить ее значение. Он стал свидетельством общего коллапса правительства и оппозиции. Расчет либералов удался, кроме того, в борьбе с «темными силами» думской оппозиции удалось создать широкое политическое объединение (к которому, в конечном счете, примкнули и верхи армии). Всякие сделки с властью становились невозможны.

Революционное правительство. В историографии Февральской революции и Временного правительства закрепилось устойчивое представление о буржуазном характере и политике новой власти. Эта оценка была дана российскими социалистами еще в ходе самих событий и изначально основывалась на характеристике первого правительственного состава (2 марта – 2 мая 1917 г.), который преимущественно формировался из «буржуазных либералов». Кроме того, Временное правительство получило санкцию со стороны прежней власти и третьейиюньской Государственной думы. Между тем, основным источником власти нового правительства была революция, а его программа и политическая практика позволяют делать вывод не о преемственности, а о разрыве с прежней политической традицией. Это было связано как с революционными обстоятельствами 1917 г., так и с представлениями политических деятелей, ставших министрами в ходе свержения самодержавия.

Не-буржуазная партия. Дореволюционные теоретические представления кадетской партии можно охарактеризовать как *«социальный либерализм»*. Кадеты считали себя «надклассовой» партией. Современные исследователи отмечают противоречивые отношения кадетов и российской буржуазии. Программа Временного правительства, в целом, соответствовала кадетской партийной программе. Представители этой партии составили костяк первого состава правительства. Между ним и Петроградским советом установилось тесное взаимодействие.

Социалистическая тенденция. Весной 1917 г. кадетская партийная программа значительно эволюционировала: в нее были внесены пункты о республике, трудовом землепользовании. Кадеты заявили о стремлении к «социализму». Весной - летом министры - кадеты осуществили введение восьмичасового рабочего дня, государственного регулирования промышленностью, монополий на хлеб, уголь, кожу, общественного контроля над землей, были резко повышены налоги для крупных производителей. Большинство этих мер встретило острое неприятие буржуазии.

Проблема реализации власти. Для реализации экономического курса требовалось создание эффективного государственного механизма, однако Временное правительство даже не ставило этой задачи. Был взят

курс на широкую демократизацию и передачу всех властных полномочий на местах органам местного самоуправления. В ситуации Апрельского кризиса министры не решились на применение силы для восстановления порядка (позднее кадеты также не решились однозначно поддержать военных - ни в июле, ни в августе 1917 г.; это было сделано только после победы большевиков). В результате было создано коалиционное либерально-социалистическое правительство, отказавшееся от любых территориальных присоединений и контрибуции после победы в Первой мировой войне. Либеральная альтернатива перестала быть реальной для политического развития России еще накануне Октября.

● 「中央アジアの革命を再考する：沿ヴォルガ・タタール歩兵旅団を手がかりに」
長縄宣博（北海道大学）

革命・内戦は、旧帝国領の広大な空間で多種多様な人間が各地の特殊な条件と格闘する中で展開したから、史料の分類や研究が帝政期の行政単位やソ連の民族共和国の境界に基づく分業体制で行われてきたのは自然である。アディーブ・ハリドの近著『ウズベキスタンをつくる』も例外ではない。この著書は、国家権力や学知が民族を作ったという近年の過度に構築主義的な見方に対して、現地知識人がボリシェヴィズムとの相克の中で、帝政期以来育んできた近代主義を実現すべく奮闘する姿を活写した。しかし、現地民がボリシェヴィズムと出会った革命・内戦期に着目するならば、ロシア内地から転戦してきたタタール人との権力闘争を抜きには複雑な理解は得られない。この越境的な現象の考察は従来の分業体制から抜け落ちてきたとはいえ、実は 1960-1970 年代にペルミ、ウファ、カザンでは、中央アジアの革命に貢献したタタール人の兵士や組織に関する回想、伝記、研究書が多く出版されている。これらの著作とそれらの依拠した史料を読み直し、新たに史料を博捜することは、ボリシェヴィキがどのようにして広大な旧帝国領のムスリム地域を再回収したのかを考える一助にもなる。

本報告では、ヴォルガ・ウラル地域とトルキスタンの革命・内戦をつなぐ視角として、沿ヴォルガ・タタール歩兵旅団に焦点を当てる。この部隊は、1919年3月末にロシア共和国革命軍事評議会の指令に基づき、軍事人民委員部直属でミールサイド・スルタンガリエフ率いる中央ムスリム軍事参事会の指導下で組織された。タタール人は第一次世界大戦にも動員されたから、ムスリム地域で戦う上で貴重な兵力だった。また、タタール人は革命前から、母語の印刷物を作成・配布し、集会、演劇、図書室、識字教室を組織する豊かな経験を積んでいたから、赤軍の政治教育でも活躍した。マーク・フォン・ハーゲンとピーター・ホルキストが論じるように、政治教育は赤軍に特異なものというよりも大戦下のヨーロッパの総動員体制から派生したものだ。タタール旅団は、こうしたヨーロッパの戦時体制の実践を旧帝国領のムスリム地域に持ち込んだ。タタール旅団の権勢は、1920年9月頭のブハラ革命とその後半年に頂点に達する。この時期、ブハラ人民ソヴィエト共和国の軍事人民委員、同人民委員部付属政治部部长、そして在ブハラ・ロシア共和国全権代表には、この旅団の出身者が就いていた。

【6月例会レポート】

○松戸清裕著『ソ連という実験—国家が管理する民主主義は可能か—』合評会
野部公一(専修大学)

本書は、ポストスターリン期のソヴェト社会を論じた力作である。本書の基本的視座となっているのは、権力者の基本認識として「人々の生活水準を向上させなければ体制が持たないとの強い危機感」が存在していた (p. 18)、という点である。このことから「スターリン死後のソヴェト政権と共産党には国家と国民を豊かにしなければならないと考えるいくつもの理由があり、実際にそのための努力」(p. 20)に邁進することになったとする。

また、共産主義建設が実際的な課題として取り組まれていたことも、この過程を促進したという指摘は重要であろう。共産主義建設は、農村においては生活・文化施設の充実として提起されたし、「共産主義的モラル」を身につけた人々によってつくられる活性化した社会の実現がめざされることともなった (p. 22-23) とする。

このような状況下で、本書においては、ポストスターリン期の政権と国民を結びつける様々な仕組みが取り上げられ、検討されている。以下では、評者がとりわけて興味をひかれた選挙制度について、若干のコメントをしたい。

本書では、(理想的に機能した場合にという限定はつくが) ソヴェト式選挙における民主的な要素が指摘されており、大きな論点となっていると思う。それらは、人口比例原則が相当程度徹底されたこと (p. 40)、選挙管理委印委員会の組織 (最低でも 3 人) (p. 56)、さらには候補者の推薦 (200 万人) は、きわめて大掛かりである (p. 68)。選挙自体が極めて大きな社会的な意義をもっていたということがわかる。また、推薦者集会が実質的な選抜の場として機能することもあり、候補者の差し替え、辞退というのが、それほど例外的なものではなかったこと、各級の代議員のリコール制度の存在は、あらためて重要であると感じた。

本書のもうひとつのハイライトは、理想的に機能する一党制民主主義と「機能不全に陥ってしまった多党制民主主義」との対比・検討であろう。ただし、このことに関して、著者は、極めて慎重にこの本の冒頭部分で限定をかけている。すなわち、「ソ連の歴史という『鏡』に映して現在の日本を論じたりするものではない。歴史からいかなる教訓を得るかは教訓を引き出そうとする者にかかっており、鏡に自分の姿のどこをどのように映し出すかは鏡を見る者にかかっている」と。

しかし、「機能不全に陥ってしまった多党制民主主義」に直面しているわれわれは、皮肉な見解をもたざるをえない。国民の声を様々な経路を通じてくみ上げ、反映させようとするソ連共産党の姿が、清々しいものに見えたのは、評者だけではあるまい。

当初は、質疑応答の内容、当日の雰囲気をも含んだレポートを予定していたが、別途、より正確なレポートが掲載される予定なので、コメントを中心としたものに変更した。ご寛容願いたい。

○松戸清裕『ソ連という実験——国家が管理する民主主義は可能か』筑摩書房、2017年、合評会

河本和子

2017年6月11日、東京大学駒場キャンパスにて6月例会が開かれ、本年1月に公開された松戸清裕『ソ連という実験——国家が管理する民主主義は可能か』筑摩書房、2017年の合評会が行われた。二名の評者、野部公一氏と油本真理氏の書評ののち、著者からのリプライがあり、フロアを交えての議論が活発に展開された。

野部氏は、本書を「ポストスターリン期におけるソヴェト社会に対する考察」であると位置づけ、政権が住民の生活向上を目指し、共産主義建設を実際に課題としたことをそれ自体として受け止めて歴史像を描くものとして高く評価した。ソ連における民主主義の実施を目指す諸活動に欠陥はたくさんあったけれども、そうした欠陥を政権の悪意や支配欲に単純に帰すべきではないという意味で著者に賛同しているものと解せる。評者から著者に投げかけられた疑問は、選挙実施に際して生じる欠陥はなぜ繰り返されるのか、当時の体制における農民の位置づけはどうか（ポリシェヴィキ政権は非農民的であるが反農民的とまでは言えないのではないか）、農村住民による無給の労働力提供は前後の時期と比較してどう性格づけられるべきかといった点である。

油本氏は「政治学と歴史学の交錯」を試みたものと本書を捉え、どちらかといえば政治学的な観点から本書を評した。評者は、ソ連における民意が独特の選挙を含めて複数のルートで媒介されていることを本書から読み取れるとしつつも、本書で描かれているような、民意を汲んでそれに応答するという「一種のアカウンタビリティ」が機能していることを「民主主義」と呼ぶのは果たして適切かという疑問を呈し、加えて、日常生活に直接かかわる要望や陳情までも民意と呼んでよいのかとも述べた。また、本書においてそれぞれ言及される、国家と社会の「協働」について、「国家が管理する民主主義」においてどう位置づけられるのかと問うた。さらに、本書の現代ロシア政治理解へのインプリケーションとして、こうしたアカウンタビリティを現代のロシアで見出すのは、政府が国民生活全般に責任を負っていた指令経済なき今は困難だろうとの指摘がなされた。

著者からのリプライの後、フロアから多くの質問およびコメントが出された。選挙が比較的大きな関心を集め、過去の研究が、公表された投票率ではなく実際の投票率をどのようにして推測してきたかが紹介され、東ドイツにおける投票しない運動などにも言及された。また、重要な指摘として、本書の分析がもっぱら国家にかかわるものであったことから、一党民主主義と呼ぶならば共産党の役割の分析が不可欠ではないかとのコメントもあった。

両評者に対するものも含めて著者の応答の中で特徴的だったのは、著者が本書で試みたのは、民主主義にかなうものとしてソヴェト政権が取り組んでいた事柄について、現代に生きる人々に思考の材料を提供することであり、全体として、あるいは理論的に、一党制民主主義がどのようなものであったか明らかにすることではない、という言明である。この点については、別の研究会で本書を評した際に私が述べたことであるが、何を根拠としてソヴェト政権が自己のやっていることを民主主義にかなうと考えたのか、論及があった方が良かったと思う。

最後に、印象的だったのは、現代日本における民主主義が「国家が管理する民主主義」と化すのではないかとの危惧がフロアから示され、評者の野部氏も現代の民主主義との比較に言及したことである。こうした思考が一般的かどうかは分からないが、他と比べて自らを省みる程度には自信喪失した状況が、日本にあるいは西側先進諸国にあるとすれば、時宜にかなった出版となったと言えるだろう。

【書評】

辻義昌氏から和田春樹『レーニン』（山川出版社、2017）についての書評が届きましたので掲載します。

○和田春樹著『レーニン』への疑問

辻義昌（早稲田大学）

書店でこの本を見た時 40 年前と同じで、лѣнивый で Ленинъ は無理と Шагинян に諭されたのに変だなと感じ、その後これがソ連崩壊後の新たな書下ろしと知って、これはいけないと疑問をメモ形式で呈することにした。書かれていることより書かれていないことが大変気になった。

2 頁：Троцкий は実在する苗字で、トロツキーの創作ではない。

4 頁：「初めてレーニンという筆名を使ったのは … プレハーノフに宛てた手紙においてである」は間違い。参考文献にある Штейн の本を読んでいない。レーニン全集 5 版で一番早い筆名 Ленин 使用は新聞 Искра 印刷所宛の手紙で、22.V—1.VI.01 の執筆とされている。その次は Лейтензен 宛ての手紙で 24.V.01 の日付。5 版を信用する限りプレハーノフ宛てその筆名は 21.X.01 が最初である。いずれにせよ、敬具でいきなり Ваш Ленин では唐突で、それ以前に自己紹介が必要だ。また印刷所への手紙で組織名を使うのも変。[XI.00 末] Stuttgart へ赴き雑誌 Заря の印刷屋と打ち合わせた時、本名を求められ、旅券にある Ленин を筆名にせざるをえなくなったとレーニン博物館館長が証言したそうである。9(21).XII.00 付パリからの警察報告に Ульянов (Ленин) という表記があり、本名がレーニンだとばれていた (Красн. Архив, 1934. т. 1, с. 138)。この報告を読んだ人はレーニンを偽名だと勘違いし、旅券の偽造に気付かなかつたようだ。妻 Н.К. の友人 О.Н. Ленина が長男 С.Н. Ленин 氏に写真と誕生日を В.И. のにすり替えて父親名義で旅券取得すべく依頼したのだった。Ленин 氏は農業省高官、弟は法務省高官で、共に В.И. とは ВЭО での勉強仲間だったので、В.И. の国外脱出を喜んで手助けしたのである。戸籍に相当する旅券をなくすと埋葬が出来なくなる心配があったが、氏の父は運よく旅券の提示を求められずに埋葬された。В.И. は大恩人に迷惑をかけたたくなく、生涯一度も Н. Ленин の Н. をフルに書いたことはない。1912 年版 Весть Петербург で Ильин だと 172 人、Ленин だと 4 人に絞られるので、図書館の閲覧者を Ильин にしたというのが 1965 年に既にこの秘密を知っていた Вольпер の説だ。妻も姉もあの名はレナ川に由来するかも等ととぼけ通した。ロシア皇帝がレナ川流域を帝国の版図に編入した功績で氏姓を贈ったのは 17 世紀のことだったのに。なお、『発達』には Ленин 氏の論文が 3 本引用されており、全集人名索引は公的身分に触れず、農学家で ВЭО で活躍と記している。

8 頁：「父はロシア帝国の最底辺から身をおこし」とか 7 頁で「最下層の町人出身」とか言い、9 頁で「貴族社会との付き合いはなかったであろう」と В.И. まで底辺出身だったかの印象操作をしている。曾祖父は自由農民になっていた。祖父は仕立職としてアストラハンで町人身分を取得し、町屋（1 階石造り 2 階木造）持主になっている。ギルド会費も人頭税も滞納するほど貧乏だったが、職人は金がないとって払わないものだ。貧困の理由は家族が 7 人もいたからだ。父は長兄が必死に働いて学校にやってくれたおかげで出世したのだ。お金がなくても学校に行ける時代ではなかった。また、シンビルスク貴族会に入会しているので、和田説は信憑性がない。1 代貴族と違い世襲貴族は結構な身分で、恥ずかしいことは毫もない。

22 頁：1900 年に出国するまでの活動は ВЭО での経済と法律の勉強が主で、穏健なイ

ンテリにすぎなかった。Webb 夫妻の『産業民主制』の翻訳でも『発達』の準備でも Струве など勉強仲間に大変世話になった。罰金法の紹介などこの時代の論文はどれも学術的で、学者の卵の手によるものだ。後年のは相手にレッテルを張るだけの純粋に政治的なものしかない。

26 頁：Что дѣлать はドイツ社会民主党の非合法時代の在り方を戦法として取り入れた物であり、あくまで啓蒙活動重視の枠内である。警察の浸透工作から組織を守ることを主眼とするものだったが、何一つ実行されたわけではなく、机上の空論に終わった。国外の暇人が安全なところで論争に耽って、内輪もめをしていますが、ロシヤ国内では党派を超えた協力がずっとあった。だから、社民党はまもなく統一大会を開くに至る。和田の説明には党再統一という重要事項が抜けている。2 回党大会の分裂で重要なのはブンドの離反である。ブンドにしか大衆組織はなく、ボにもメにも自称革命家しかおらず、組織の体をなしたものは全くなかった。

45 頁：プハーリンが「ウィーン大学で経済学を学び」とあるが、Гранат の自伝には слушал Бем-Баверка и Визера とあり、単に講演を聞きに行ったにすぎない。

49 頁：帝国主義論は重要ではない。カウツキーと決別し、労働運動の分裂を正当化する根拠にし、社会民主主義を捨て、共産主義というカルトへと舵を切るという 20 世紀の悲劇の幕を上げたのが重要だ。

60 頁：В.И.が警察に追われたのは「全権力をソビエトに」と言ったからではない。ソビエト指導部は政府とよい協調関係にあり、そんなことが問題になるはずがない。それよりドイツから援助を受けた通敵行為の疑いが濃かったからである。実際多少の資金援助があったらしいが、10 月の権力奪取後とは比較にならない。10 月後は堂々とドイツに協力関係を求め続け、秘密協定を複数結び援助を受けた。異様な英仏敵視の動機はこれだ。

63 頁：В.И.の手法は欺瞞にある。反戦だの土地を農民へだの労働者自主管理だの民族独立だの信仰の自由だの何でもよい、それが進歩的であれ反動的であれ構わず利用していく。それらは権力奪取のための口実にすぎない。何一つ達成できないことは最初から分っていた。『国家と革命』に明らかなように、そこには近代的な法治国家や基本的人権の理念などなく、力を握ったものが力で支配するという専制国家の姿しかない。こういう恐るべき状況はかつて『二つの戦術』のなかで、たとえ可能でもやってはいけなかったことだったが。

同頁：「モスクワでも、士官学校生を中心とする反ボリシェヴィキ軍は敗北した。」酷いデマである。ペテルブルグでもモスクワでも 1917 年夏に普選法による市会選挙があり、自治体が 1871 年のパリ・コミュンより民主的に成立していた。モスクワではソビエト内部で協調派が多数派のままだった。モスクワでボが権力をとったのは市会とソビエトが郊外に陣取ったボ軍との流血の対決を避けたからであった。首都以外では武力による征服が基本となった。首都では兵士の数が多すぎ、他の住民の意思が通じなかったのである。首都の労働者は 8 月以降、生活難が押し寄せ、田舎に帰るか、食糧の買出しに行くかで、革命運動どころではなくなっていた。17 年 12 月にはヴィボルグ地区の工場は殆ど閉鎖された。

67 頁：「ソビエト執行委員会の三分の一 ... 逮捕された。」第 4 回ソビエト大会の代議員の半数近くが逮捕されたし、別に代議員全員が逮捕されてもよかった。В.И.は自分が権力を離れたら殺されると恐れ、無茶に走った。モスクワの守備隊で政権側の要請に応じた部隊はなく、レット人部隊だけが使えた。ちなみにその部隊はラトビア社民党という独特の政治集団で、ボとは別組織だった。肝心のボの軍事組織もこの暴走には付いて行けなかったのだ。

71 頁：「毒ガスも使用されたといわれている」などと生易しいものではない。階級戦

争の名のもとに無差別の大量殺戮が行なわれた。カチンの森という大量虐殺場は内戦時代に作られた。このテロルの経験は農業集団化でも発揮された。国民を恐怖で支配するのが共産主義の基本となった。それだけでない。その後のロシヤで旧有産階級の子孫は非人身分として差別された。ニコライ2世はロシヤを20世紀における18世紀の国家といったが、至言である。

【ロシア史研究会委員会より】

今号には返信用のはがきを同封しています。大会当日に配布する報告者のレジュメと懇親会の準備のために、出席者の概数を把握する必要がありますので、出欠のご予定を10月6日（金）必着でお知らせください。欠席される方については、総会での委任の意思確認を兼ねています。

大会プログラムならびにその他の大会に関する情報は、ロシア史研究会のホームページ (http://www.gakkai.ac/russian_history/) に掲載しています。共通論題・自由論題の報告者のフルペーパーをこのホームページからダウンロードできます。上記ホームページにおいて、大会に関する新着の情報、プログラム等の修正・訂正、報告ペーパーの更新を随時行いますので、適宜ご参照ください。

なお、今年も、両日ともに事務局では弁当などの昼食の手配を行いません。各自でご用意くださいますよう、お願いいたします。また、会場周辺の店舗は限られ、日曜は生協食堂も閉まっていますので、会場に来る前にご用意くださることをお勧めいたします。

ロシア史研ニュースレター
第107号 2017年9月7日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
(井上岳彦、立石洋子)
〒153-8902
東京都目黒区駒場3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻 鶴見研究室気付
ロシア史研究会事務局
